関西自然保護機構会報（18）53－60，1989

現在伐採中の大塔山系前ノ川国有林について[1)]

後　藤　　伸[2)]

Ⅰ　はじめに

紀伊半島の南部，和歌山県の田辺市と新宮市とを結ぶ直線上のほぼ中央に「大塔山」「法師山」という二つの山が並んでいる。共に1120ｍの標高をもつ低山であるが，それを取り巻くように野竹法師山・ゴンニャク山・嶽山・三ッ森・百間山・高尾山・入道山・大倉畑山など1000ｍ前後の山々が林立して一大山系を形成している。筆者らはこの山系を「大塔山系」と呼んでいるのである(図１・図２)。



図１　大塔山系の位置図

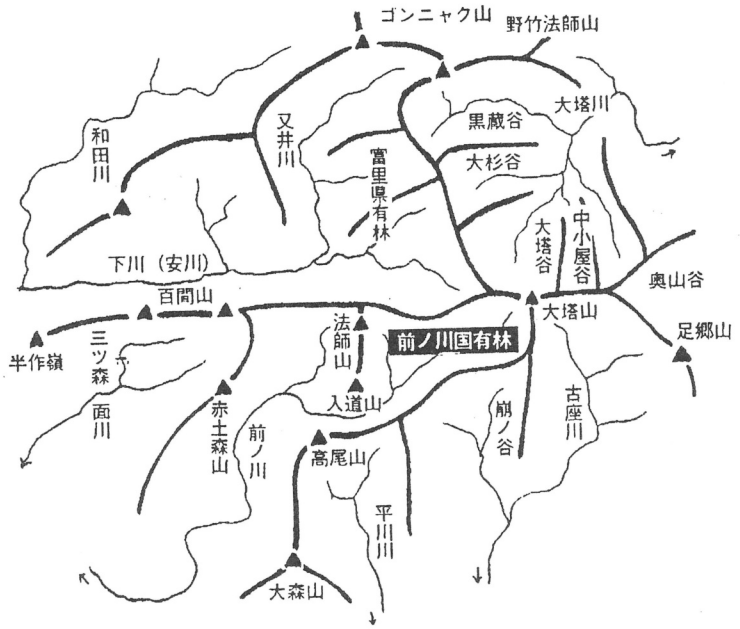


図２　大塔山系概念図

1）関西自然保護機構業績第76号
2）〒646　和歌山県田辺市秋津町1703

この山系は，紀伊半島南端部の中核をなす山地であり，黒潮の強い影響をうけて本州のどの山地よりも温暖であり，年雨量4000㎜という多雨地帯である。また，地形が複雑であり急峻であるため，森林の開発が他地方よりおくれたことも相まって，近年まで広い森林地帯が残存していた。この山系の森林は，概観して常緑カシ類を主体とした照葉樹林であるが，その中に小規模な夏緑樹林も散在し，岩崖地が多いため針葉樹林もモザイク的に混在しているという複雑なものなのである。

自然林が残されていた関係上，生育する動植物もまた豊富で，南北両系統が多数混生して複雑で特異な生物相を示している。

II　前ノ川国有林

大塔山頂から南西に流れて法師山・入道山と高尾山の間を縫って木守・五味を通過し三川ダムに注ぐ渓谷が，日置川の支流前ノ川である。国有林はこの川の源流部入道山の南端から大塔山頂に至る地域で，その面積は約1300 ha，急峻な大塔山系の中にあって，比較的ゆるやかな地形をもった地域である。

筆者は1951年からこの山系の昆虫を調査してきたが，当時この地域は民有林であって，巨大な針葉樹や有用広葉樹（ケヤキ，ミズメなど）を択伐した形跡はあったが，原始の姿そのまま残ると思わせるほどの大森林であった。

ところが1960年頃から，大塔山系の森林地帯の各所を買い占める企業や政治家の暗躍がウワサされるようになり，前ノ川谷の森林地帯は森林開発の某企業によって伐採されることになった。二本の林道もつくられ，伐採は５～６年にわたって行われたが，この地域へ調査に入ることが許されず，ベールに包まれたまま約500 haの照葉樹林は消えた。その跡地には地元の森林組合によってスギの植林が行われていたが，伐採が終わった段階で，この森林開発企業が消えたという。

こんな大事件も何らマスコミにとり上げられないまま，1969年に国が買い取って田辺営林署所轄の国有林となった。田辺営林署では以後，約10年にわたって伐採跡地の植林地を整理し，未植林地にも植林して管理体制を整えた。

この期間に当たる1969年から1974年にわたって，筆者は同志を募って大塔山系の北部を占める大杉大小屋・黒蔵谷国有林（新宮営林署管轄）の照葉樹林保全のため，生物相調査と保護運動を展開した。そのため，営林署側との長い交渉をもったわけであるが，常に田辺営林署は〝新宮営林署と違って地元の人たちの反対を押し切ってまでして，無理な伐採はしない。特に前ノ川国有林については，将来にわたっても伐採の計画はない〟の意向を言明した。営林署長は２～３年で変わることがあるため，新しい署長にはその都度，前ノ川谷禁伐の件について念を押しておいた。

ところが，筆者等が安心して監視の目をゆるめた1978年になって，急に態度を改め，前ノ川国有林の源流部の伐採に出たのである。伐採のはじめは，以前民有林時代の伐採跡地の整理のためのようにカムフラージュをしていたが，徐々に林道を改修して延長し，伐採面積も年に５haから８haへと増加の傾向を示している。

前ノ川国有林の1989年までの経過は以上の通りであるが，伐採の現況を図示すると第３図のとおりになる。

III　前ノ川国有林の残存自然林の概要

１．植生

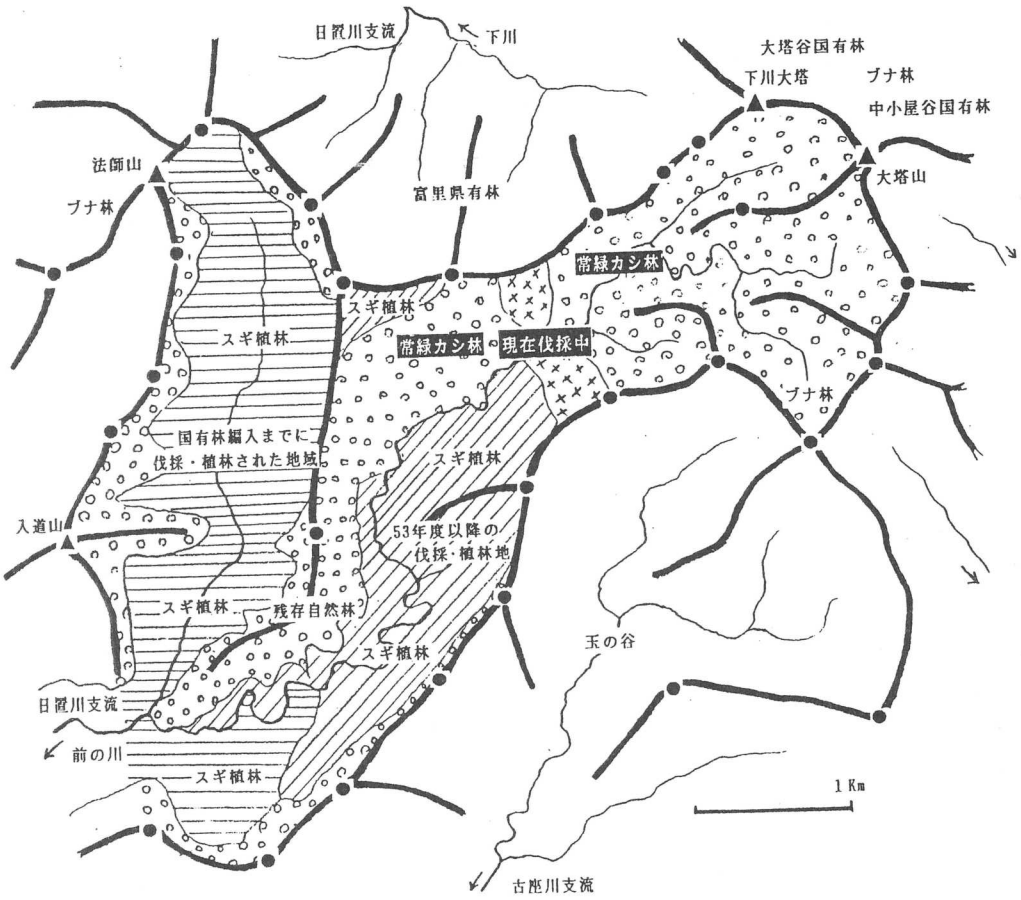


図3　前ノ川国有林 概念図

大塔山系の植生は極めて複雑なため一見混乱した森林の様相を示していると言われてきた。菅沼・水野・後藤（1974）は次の群集・亜群集並びに群落を記録している。

A，ブナ－スズタケ群集（鈴木　1949）　B，アカガシ－ミヤマシキミ群集　鈴木・須股，1964

B－1，スダジイ亜群集（新）　B－2，典型亜群集　B－3，スギ亜群集（新）

B－3－a，スダジイ変群集（新）　　B－3－b，典型変群集（新）

C，ウラジロガシ－ヒイラギ群集，菅沼，1965　D，ヒノキ－ツクシシャクナゲ群集，山中，1957

D－1，典型亜群集　D－2，ツガファシース

E，トチ－サワグルミ群集

また，新谷・水野・木下ら（1979）は，前の川国有林において次の群落・群集を記録している。

1，モミ－シキミ群集（鈴木・蜂屋　1961）

A，ウラジロガシ亜群落　B，コカンスゲ亜群落　a，典型　亜群落　b，ブナ　亜群落

2，ヒノキーツクシシャクナゲ群集（山中　1960）　3，渓畔林群集

以上のように大塔山系の森林は極めて複雑であるため，群落区分が容易でないことが納得されると思うが，前ノ川国有林にはスギの自生はごく僅かしかない。

全体としてブナ林は山頂部よりも北向き斜面の少し下った地点によく発達し，モミを多く含むアカガシ林は中腹から山頂部へかけての緩傾斜地に広がっている。

ホンシャクナゲ・ウバメカシを伴うヒノキ・ツガ・コウヤマキ等の針葉樹林は標高に関係なく岩尾根や岩崖地に発達している。この林分にはゴヨウマツ・トガサワラの大木が多く出現し，場所によってはそれぞれの樹木が純林状に生育するところもある。

ウラジロガシ林は斜面の中部以下で広範囲にわたって発達しているが，モミ・ツガ・トガサワラなどの針葉樹を伴うことが多い。

スダジイはこの山系では極めて広範囲に出現し，岩尾根ではウバメガシ・シャクナゲなどに混じって生育することもあれば，ゆるやかな尾根部ではブナ・アカガシなどとも混生する。もちろんウラジロガシ林の中にも多い。

渓畔林としてはトチ・サワグルミ林が目立つが，前の川源流部ではクマシデ・ヒメシャラ・イヌシデ・ミズメ・ケヤキ・チドリノキなどの落葉樹が多量に生育している。

2．分布上注目すべき植物

1）スギラン　*Lycopodium crptomerium* Maxim.（ヒカゲノカズラ科）渓畔部で樹木に着生。

2）オオフジシダ　*Monachosorun fiagellare* Hayato（ワラビ科）フジシダと共に渓畔部の岩石地に生育。

3）オサシダ　*Struthiopteris ambillis* Ching（シシガシラ科）大塔山系に多産，当地域の渓流の岩崖にも着生。

4）ツクバネソウ　*Paris tetraphylla* A. Gray（ユリ科）大塔山系では山麓から山頂部まで生育。

5）ミヤマナミキ　*Scutellaria shikokiana* Makino（シソ科）渓流岩上でも見られる。

6）オオギカズラ　*Ajuga japonica* Miq.（シソ科）和歌山県では稀少種，渓側の川原に生育。

7）オオナンバンギセル　*Arginetis sinensis* G. Beck（ハマウツボ科）本県では極めて稀。渓畔部で採集。

8）キナンカンアオイ（仮名）*Heterotropa* sp.（ウマノスズクサ科）本県固有種と考えられるもの。開花期が早い。

9）クルマギク　*Aster tenuipes* Makino（キク科）本県南部渓谷岩崖等にのみ生育。

10）ヒメイワカガミ　*Shortia soldanelloides* Makino var. *ilicifolia* Makino（イワウメ科）大塔山系では標高300m位まで下降して生育。

11）アケボノツツジ　*Rhododendron pentaphyllum* Maxim.（ツツジ科）大塔山系周辺部尾根及び四ノ谷国有林などに生育。

3．動物相の特色

1）高等動物のうち特に哺乳類では，ニホンザル・ニホンカモシカはじめ本県下に生息する大部分の種が生息している。

2）野鳥ではコノハズクやクマタカなどのような森林性のものが主体となり豊富である。しかし下流側の伐採地や植林地においてはホオジロやモズなどのような野鳥の増加が見られる。

3）爬虫両生類ではタカチホヘビ・オオダイガハラサンショウウオなどを中心に，森林性の種に

恵まれている。

4）森林におおわれた前ノ川源流部の渓流にはアマゴ・ウグイをはじめメカシトンボ・サラサヤンマが生息し，多くの渓流性の昆虫に恵まれている。またカワガラスやヤマセミなどの野鳥も常に見られ，安定した川の生態系を示している。

5）昆虫類はかなり多年にわたって調査されている。それによると，

a　昆虫相の中には，本州中部の山岳地帯に分布の本拠をもつ北方系山地性と考えられている種が数多く見出されている。

b　西南日本の南岸線に沿って分布する東洋熱帯系の昆虫がある。これらは温暖な黒潮の影響をうける地域のみに帯状に分布するのであるが，それらの昆虫もまた，この奥深い山間部にまで多く侵入していることが確認された。

c　ナンキコブヤハズカミキリやセダカテントウダマシなど紀伊半島を中心に分化した特殊な昆虫群がある。その大部分の種が本地域内に生息している。

6）クモ類においてもニシキオニグモが発見されているなど，昆虫と同じような傾向を示している。

7）陸産貝類においては，紀伊半島南部の地域性を示す大部分の種が知られている。

4．主要な動物について（その1）

1）ホンシュウシカ　*Cervus niponon centralis* Kishida（シカ科）若い植林地と前ノ川源流部の自然林内に多く生息。

2）ニホンカモシカ　*Capricoruis crispus*（Temminck）（ウシ科）1977年以来の生態調査では前ノ川谷国有林及びその隣接地域の生息個体数は約10～13。

3）テン　*Martes melanpus melanpus*（Wagner）（イタチ科）1977年捕獲したものは，ススステン *bedfordi*。

4）ニホンツキノワグマ　*Selenarctos thibetanus japonicus*（Schlegel）（クマ科）1960年頃までは確かに生息。現在は"まわりぐま"と考えられる。なお，この地域のものは冬も活動することが観察されていた。

5）ニホンザル *Macaca fuscata*（Blyth）（サル科）頭数はわからないが，一群が生息。

6）キバシリ　*Cerfhia familiaris* Linne（キバシリ科）1971年12月25日大塔山西尾根において確認。

7）ヒガラ　*Parus ater* Linne（シジュウカラ科）大塔山系では山麓部にも生息。

8）オオルリ　*Muscicapa cyanomelana* Temminck（ヒタキ科）大塔山系に多産する代表種。同属のキビタキ　*M. narcissina* T. も生息。

9）ヤマセミ　*Ceryle lugubris*（Temminck）（カワセミ科）本地域内には1♂♀が常に生息。

10）ブッポウソウ *Eurystomus orientalis*（Linne）（ブッポウソウ科）当山系には点々と渡来営巣地あり。

11）コノハズク　*Otus scops*（フクロウ科）近年自然林が狭くなったので個体数は減少。オオコノハズク　*O. atio semitorques* T. *et* S. も生息。

12）クマタカ　*Spizaetus nipolensis* T. *et*. S.（ワシタカ科）入道山および大塔山周辺でよく観察される。

13）オオダイガハラサンショウウオ *Hynobius*（*pachypalaminus*）*boulengeri*（Thompson）（サンショウウオ科）源流部の広い自然林内には全体に生息。

5．主要な動物について（その２）

1）ミヤマカラスアゲハ　*Papilio maackii tutanus* Fenton（アゲハチョウ科）前ノ川谷一帯で発生し個体数が多い。

2）ヒサマツミドリシジミ　*Chrysozephyrus hisamatsusanus* Nagai *et* Ishiga（シジミチョウ科）前ノ川国有林のウラジロガシ林に発生。

3）キリシマミドリシジミ *C. ataxus kirishimaensis* Okajima（シジミチョウ科）ウラジロガシ・アカガシ林で発生し個体数が多い。

4）スギタニルリシジミ　*Celastrina sugitanii* Matsumura（シジミチョウ科）前ノ川谷の渓流沿いに生息。４月中頃発生。

5）ニホンセセリモドキ　*Hyblaea esakii* Sugi（セセリモドキ科）前ノ川国有林入り口付近で発見。

6）キイオサムシ　*Apotomopterus yaconinus* subsp. *kiiensis* Nakane *et* Iga.（オサムシ科）ヤンコオサムシの紀伊半島における地方種。

7）コキノコゴミムシ　*Coptoderina japonica* Bates（ゴミムシ科）南方系の種で本州では大塔山系以外未記録。

8）コヨツボシアトキリゴミムシ　*Dolichoctis striata* Schmidt-Goebel（ゴミムシ科）東南アジアーオーストラリア区に分布する種。県下における数少ない産地。

9）ルリセンチコガネ　*Geotrupus auratus* subsp. *ruri* Nakane（センチコガネ科）森林にすむ糞虫で紀伊半島特産種。

10）オオダイセマダラコガネ　*Blitopertha ohdaiensis* Sawada et Yokoyama（コガネムシ科）森林性の種で，紀伊半島から四国・九州に分布。

11）ナンキコブヤハズカミキリ *Parechthistatus grossus* Yokoyama（カミキリムシ科）大塔山系を中心に紀伊半島南端部で分化した昆虫。

12）コウヤホソハナカミキリ　*Strangalia koyaensis* Matsumura（カミキリムシ科）県下の山地帯に分布する普通種。

13）ルリボシカミキリ　*Rosalia batesi* Harold（カミキリムシ科）山地性の種で個体数少ない。

14）クロジョウカイボン　*Athemus suturellus*（ジョウカイ科）県下の唯一の産地，本地域から黒蔵谷にかけて発生。

15）アミダテントウ　*Amida tricolor* Harold（テントウムシ科）暖地性の種。

16）セダカテントウダマシ　*Bolbomorphus gibbosus* Gorham（テントウダマシ科）紀伊半島で特別に分化した種。

17）クロボシヒラタシデムシ　*Oieoptoma nigropunctata* Lewis（シデムシ科）山地帯のみに分布する種。

18）ムカシトンボ　*Epiophlebia superstes* Selys（ムカシトンボ科）清冽な安定した渓流にのみ生息する種。多産。

19）ヒメハサミツカメムシ　*Acantosama foricula* Jakovlev（ツノカメムシ科）県下における唯一産地。

20）エゾツノカメムシ　*A. expansum* Horvath（ツノカメムシ科）北方系山地性の種。

21）ヤマグルマグンバイ　*Stephanitis yasumatsui* Takeya（グンバイムシ科）ヤマグルマの葉裏に寄生するグンバイムシ。

22）エゾハルゼミ　*Terpnosia nigricosta* Motshulsky（セミ科）北方系のセミ。ヒメハルゼミ *Euterpnosia chibensis* Motshulskyと混生。

Ⅳ　おわりに（保護運動の経過）

以上，記述した植生ならびに動植物は，前ノ川谷国有林およびその周辺地域の特色を示す一端である。しかし，かつての広大な照葉樹林は1989年現在，源流部約40％を残しているにすぎない。したがって，このまま伐採が強行され続けるならば，これら貴重な動植物は死滅するに違いない。

大塔山系では1960年代にはいって新宮営林署所轄の国有林（山系の北東部）において大規模な森林伐採が行われた。1965年から今西錦司・吉良竜夫氏らはじめ地元筆者等は，この山系の学術上の重要性を説き，原生林保全を強く訴えた。しかし最後に残っていた“完全な形の原生林”中小屋国有林は皆伐された。筋を通して陳情を続けた筆者等にたいして，大阪営林局は“伐採のための林道をすでに開設しているから”等の理由で皆伐を強行した。取り組みの手遅れを痛感した筆者等は，隣接している大杉大小屋国有林・黒蔵谷国有林約1000haの保全を計画した。この地域の森林地帯は約80年前に択伐しているため原生林ではないが安定したまとまりのある照葉樹林であり，1000haという広がりそのものが特に重視されるべきものであった。

当時大阪営林局は“中小屋谷国有林は計画通り伐採するが，大杉大小屋・黒蔵谷国有林については伐採計画はない。この森林地帯が若し学術的に保全する価値があるのなら保全しよう。そのための資料を見せて欲しい”との回答があった。これをうけて筆者等は徹底的に調査を実施し，当該国有林はじめ大塔山系全域の生物相を解明して，伐採強行の暴挙を阻止しようと計画した。

学術調査は1969年から開始した。調査は５年間をめどに東京大学の故倉田悟氏，京都大学の村田源氏，宇都宮大学の田中正氏，森谷憲氏，千葉大学の沼田真氏，奈良女子大学の菅沼孝之氏，和歌山大学の牧岩男氏ら多くの専門学者の指導支援を受けながら，地元同志で結成した“大塔山系調査グループ”（現在の和歌山県自然環境研究会）全員で展開した。それまで，この山系の生物相調査は筆者ら２～３名のものが細々とかかわっていただけの未調査地域であったが，５年後にはこの山系の生物相および植生が先に述べたように，日本本土では稀に見る貴重なものであり，かけがえのないものであることが判明したのである。

調査活動と並行して保全運動も活発に展開した。日本生態学会・日本昆虫学会・日本自然保護協会・日本自然保護連合等多くの学会や団体の支援を受けたため，運動は全国規模となり，国会で大塔山系国有林における林野庁の照葉樹林伐採問題が論議されたのである。

にもかかわらず，1974年末，大阪営林局は大杉大小屋国有林と黒蔵谷国有林の60％伐採計画を打ち出してきた。県および営林局に対して地元町村や山林労務者からの伐採実施請願書提出に基づいての措置であるという。同年４月，これに対して県知事から調停案が出された。これは大杉大小屋・黒蔵谷1000haの約$1/2$を伐採し，残り$1/2$を永久に保全するというものであった。筆者等はもちろんこれに反対であったが，いかんともしがたく涙を呑んだ次第である。源流部約500haの自然林が以後1989年現在に至るまで伐採が続いている。

前ノ川国有林は，この伐採によって消滅してしまった黒蔵大杉国有の源流部の森林に相当するものであって，今回のこの前ノ川国有林の残存自然林伐採が強行されると，この山系の暖温帯上部の照葉樹林が全く姿を消してしまうことになる。

営林署側は，伐採の理由として，地元の人々の就労事情をあげるが，実情はごくわずかな人数であり，すでに植林した広大な施業地の手入れを不十分な状態で放置したままである。この地域

を撫育するだけでも地元の人だけでは不足するはず。独立採算制というシステムを云々するが，大塔山系の源流部の急峻な山々を伐採してこれに植林して，経済的に成立つはずがない。その上今回の場合は，地元の大塔村の自然保護団体からも伐採中止の声が出ている上，陳情書まで提出されているのである。また，4000㎜もの多雨地帯の山々を伐採した場合，いかなる災害の起因となるかということも営林局の方では充分知っている上でのことであろう。

わが国唯一の森林専門の行政機関である林野庁が，開発の名のもとに強行する暴挙とも言えるこの自然破壊は絶対許してよいものではない。

追記：この報告書を稿正している1989年７月７日現在田辺営林署の方では「**残存自然林を保全するため伐採計画の見直しが行われている**」との情報が入っている．この見直しを大阪営林局の方で承認することの１日も早い事を願ってやまない．

参　考　文　献

乾風　登．1971。大塔山系の水生昆虫 Ⅱ．大塔山系の自然－生物相調査記録－，（Ⅳ）53－59.

後藤　伸．1971．大塔山系の概要．大塔山系の自然－生物相調査記録－，（Ⅰ）２－３．

―――．1974．吉野熊野国立公園及び周辺地域の昆虫．吉野熊野国立公園学術調査報告（和歌山県地域），日本自然保護協会関西支部，資料№５　67－73.

―――．1979．前ノ川谷国有林の動物相．和歌山県自然環境保全地域候補地調査報告書・前の川天然林．38－63.

後藤・山元．1972・大塔山系．高等植物の分布資料．大塔山系の自然－生物相調査記録－，（Ⅲ）24－27.

木下慶二・水野泰邦・新谷育生．1979．前の川谷天然林の植生．和歌山県自然環境保全地域補地調査報告書・前の川天然林．３－37.

吉良竜夫・小川戻人・川辺宗視・川村俊蔵．1964．大塔山の残存天然林調査報告．日本自然保護協会関西支部 資料№１，１－10.

前田亥津二．1974．大塔山系及びその周辺に見る鳥類群集と生息環境の関係について．大塔山系の自然－生物相調査記録－，（Ⅳ）37－40.

湊　宏．1971．大塔山系の陸産貝．大塔山系の自然－生物相調査記録－，（Ⅰ）36－37.

中谷進治．大塔山系の蛾類．大塔山系の自然－生物相調査記録－，（Ⅳ）48－52.

末松四郎ほか．1979．特別天然記念物ニホンカモシカに関する緊急調査報告，和歌山県教育委員会．119

菅沼孝之・後藤　伸・水野泰邦．1974．大塔山系大杉谷・黒蔵谷の植生．大塔山系の自然－生物相調査記録－，（Ⅳ）６－23.

玉井済夫．1972．大塔山系のオオダイガハラサンショウウオについて．大塔山系の自然－生物相調査記録－，（Ⅲ）40－43.

吉田元重．1974．大塔山系の甲虫．大塔山系の自然－生物相調査記録－，（Ⅳ）41－45.